

医学教育ニュース

(第 68 号)

令和 5 年 1 月 27 日 発行

編集 久留米大学医学部教務委員会 広報活動部会

* 贈る言葉 *

退職される先生方にメッセージをいただきました

『医師になるこれからの君たちへ』

赤木 由人 / 外科学講座 主任教授

医師は医療および保健指導を掌ることによって、公衆衛生の向上および増進に寄与し、国民の健康な生活を確保するものとする（医師法第一章第一条）とある。そして医師国家試験に合格し、厚生労働大臣の免許を受けなければならない。医学は時代とともに進み医師免許を取得した医師のキャリアは多種多様となってきた。私の周囲の医師免許取得者のキャリアパスをみると、多くは臨床医であるが、他に研究者、行政官、政治家、弁護士、起業家など多種多様である。臨床医も勤務医と開業医に分かれる。私はほんの一時期に基礎研究をかじったが、人生の多くの時間を外科勤務医として患者に対峙してきたので、その経験から君たち医学生に

エールを送りたいと思う。

国民の多くは医師（＝臨床医、医者）を特殊な職業と感じていると思う。そして、自分の仕事に偏った優越感を抱いている医師も少なからずいると思っている。わたしは、現場で働く医師は社会人でありブルーカラーに近く自己犠牲を強いられることの多い職業だと思っている。医師は社会人としての礼節をわきまえ、協調性があり、謙虚に学ぶ姿勢と豊かな人間力が必要で、患者やその家族からの信頼を得ることが大切だと感じている。

私は 2002 年から約 20 年間大学人として勤務してきた。「大学人の使命は人材育成、研究、地域貢献」と自分に言い聞かせてきた。どれだけのことが達成できた

か自慢はできないが、**医師**として以下のような資質が必要と思ってやってきた。

- ・記録を残す習慣（カルテ、論文、メモなど）
- ・新しい知識や技術の吸収を継続する能力
- ・他人への説明は、短く、わかりやすくできる能力
- ・怒らない能力（平静な心）
- ・自己健康管理能力（健康な心身があって初めて行動できる）
- ・自分が受けた理不尽は自分の代で終わらせ、部下を指導する覚悟がなければならない。

また**外科医**として安全で的確な手術を遂行するには、術前の状態を把握し、画像

を読み込んで手順を描く。予測される障壁があれば、次の手も準備しておく。何があっても諦めずに、ここが最後の砦と思う覚悟で最善を尽くす。考えずに行う手術を数多くこなすよりも、経験症例は少なくても用意周到に考えて1例を大切に行うほうがはるかに価値がある。（悩んだ手術は最後まで脳裏に残る）こういったことの積み重ねが**人間力を醸成**していくと思っている。

日本はすでに少子・超高齢社会であり人口は減少していく。一方で医師数は増えている。これからの医師は淘汰され選ばれる時代である。医師としての生き方はさまざまであるが、取り残されないように持続可能な目標を持ち続けて欲しい。No dream, no future.

久留米大学の医学生へ ―初心にかえり、そして将来をみつめよう―

牛嶋 公生／産婦人科学講座 主任教授

1983年に久留米大学医学部を卒業し、早や40年になる。自分の学生時代を思い起こすと、今に比べ時間はゆっくり流れていた。現在は遥かに病気の種類も増え、機器や検査法の進歩により診断、治療技術も大幅に進歩し、学ぶべき事柄は40年前に比べると圧倒的に膨大になった。昔は講義も多くが黒板を用いた板書だったが、今そんな事したらとても時間が足りない。ただし、国試合格率が全体で約9割というのはほぼ同様だった。9割といっても全員が全員、合格を目指して必死に勉強した中の割合なのだから、半端な状態で受けても合格できないというプレッシャーは現在

と同様で必死に勉強した。だから二度とあの試験は受けたくない。

随分以前にチュートリアルを担当していた時、ある学生から「他の大学はもっと長い夏休みがあるのに、ここは何故こんなに短いんですか？」と質問されたが、答えはひとつ「医学部やからやろ」。なぜ6年間もカリキュラムが必要なのか？医師となるのに必要だからだ。

医学部に入学した以上は医師にならなくてはなんの意味もない。そういう学部だ。他の学部の学生は研究して論文書いて卒業できても、仕事につけるかどうか分からない。同時に就職活動もやらなくてはならない。

必ずしも志望通りにならず、給料を得るために嫌で嫌で仕方がない仕事を頑張っている人は世の中にたくさんいる。

一方、医学生は勉強さえすればいい。専門分野も自分で選べる。多少肉体的にきつかったり、一人前になるのに多少時間がかかるし、努力が報われないことだってしょっちゅうある。人の命を預かる以上、当然重い責任がある。でも、当たり前の仕事をしただけで沢山の感謝の言葉がもらえる。患者さんの笑顔が見られる。そして、仕事をしながら先輩だけでなく、患者さんからもたくさんの学びがあり、自分次第でどこまでも向上できる。基礎研究でも新たな発見の喜

びがある。こんなやりがいのある職業はないと改めて思う。

みんなはそこに到達したいと思ってこの大学に入ってきた。入試の面接でそれぞれ自分の将来への思いを述べたでしょう？今が多少つらくても、それを思い出して頑張ろう。易きに逃げるな。魅力ある職業につくには、当然ながら努力が必要だ。勉強の中にも新たな発見があり、理屈が解れば理解が進み多少は楽しくなる。つらくなったら初心を思い出して、将来の自分をイメージしよう。過ぎてみればつらい時間は一瞬なのだから。

「学問に王道なし」

田中 永一郎／生理学（脳・神経機能部門） 主任教授

紀元前四～三世紀ごろの古代ギリシャの数学者エウクレイデス（ユークリッド）は、エジプトの都、アレキサンドリアで幾何学を教えていました。あるとき、エジプト王のプトレマイオスが、エウクレイデスに「幾何学を学ぶのに、おまえの著書『原論』を読むよりも簡単な方法はないか」と尋ねたところ、エウクレイデスは「幾何学には王様のための特別な道などございません」と答えたということです。権力をふるえば、何でも手に入れる王であっても、学問を身につけるには庶民と同様に、地道に努力するしかない。そこから転じて、学問には安易な方法はなく、誰もが等しく経なければならない過程があるということを表す言葉として現在では使われている。

21世紀の現在においても、学問を学ぶのに安易な方法はない。学問を学び始めた

最初は、定義や定理など煩わしくて、「分かりきったことをわざわざ言葉にして何してるんだ？」と考えることも少なくないが、学習を進めていくと、それがとても大事だったことが分かってくる。一通り学問を全体通して学んでみると、全体を俯瞰してやっど何がどこに影響を与えていて、どのように関連しているかを捉えることができるようになり、初めて物事を考えていく上で揺るぎない地点として定義が重要であることや定理の重要性が分かってくる。ここまで来て初めて学問を学んだと言えるのだろう。

最近は〇〇学といわれるものの中に蓄積された知識量も多く、学生も全てを学ぶことはできないという物理的な（主に時間的な）制約がある。だから〇〇学の中の重要部分（中心部分あるいはコア）のみの学習になるのも致し方のないことであると半分諦め

ている。それでも学生諸君には学問の重要部分だけでも一通り全体通して学んで(成書を読んで)欲しい。間違ってもマルチプル試験問題を解きながら文章が正しいか間違いかが分かるようにだけ関係部分を抜き出して勉強するようなスポット勉強をして欲しくない(再試験直前の学習時において戦略的にはあり得るだろうが、日頃の勉強ではして欲しくない)。ただでさえ学問の重要部分だけを抜き出しているのに、さらにその一部だけ試験に出るからと勉強するだけでは、人体のことを理解するなど到底できない。学生の無知は進級できないうちは他害を与えないが、無知のまま進級すれば、患者の

QOLを害するし、最悪の場合患者を殺すことになりかねない。学生にも自重していただきたいし、教官にも適当なところで許容せず「ならぬものはならぬ」とはっきり言っていただきたい。基礎学力の上に臨床の学力、経験が上乘せされるのだから、何より学習した知識は次の学年になったら忘れずに、ずっと一生涯保ち続けて欲しい。そのためには、「あれ、なぜこうなるのかな」と一瞬でも疑問に思ったら、昔に習ったことに立ち戻って成書を開いて学習しなおし、忘却を防ぐようにして欲しい。疑問を疑問として残さず、その日のことはその日の内に解決していくことを望む。

「主語は学習者」

高森 信三／臨床研修センター 教授

学習においてはいかなる時も主語は学習者です。ちょっと勘違いがある様で「授業がわかり難い」、「試験が難しい」などの言葉や、進級判定の時期になると「何人留年させるのですか?」「〇〇は一本釣りがあるらしいですね?」などの会話を耳にしてきました。何となく理解できるのですが、主語は学習者(学生)ですので授業内容や試験に対する質問や評価は必要ですが、私的な感想はあまり意味がありません。また、留年はさせるものではなく、学習者が進級条件を満たせなくて進級できない(留年する)ということです。「一本釣り」という言葉も早く死語となって欲しいのですが、1科目でも単位が取れなかったら進級できないとの決まりがあるだけです。当然、科目責任者は熟慮のうえ再試験、採点(評価)を行っていることを理解すべきでしょう。さて、大学は高等教

育機関として、「卒業までに学生にどのような知識や能力を身につけさせるのか」というものが問われています。「アウトカム基盤型教育」では卒業までの学習成果の到達目標として、「～ができる」という表現が使われるのが一般的です。「何を学ぶか」ではなく、「何ができるようになるのか」に眼目が置かれています。そう視点を変えるだけで、学び方の意識が変わる面もあるでしょう。いずれにしても、卒業までに「何ができるようになる必要があるのか」を確認し、確実に「できるようにする」主体的な学びの姿勢が求められることは確かです。しかも、「～ができる」の内容を見ると、知識・技術以外に、コミュニケーション力、倫理観など、いわゆるコンピテンシーと呼ばれる行動特性、人間性などの力も「身につけて、できるようになる」ことが含まれています。当然、それ

らのコンピテンシーも卒業に際して何らかの形で問われることになるでしょう。知識の修得は十分でペーパーテストで高得点であっても、面接などでコンピテンシーが不十分と見なされれば、卒業できない可能性もでてきます。今後は、コンピテンシーも意識的に高める努力が大切になります。

英語の格言に、“Work hard, play hard.” というものがあります。意味は、「良く学び、よく遊べ」ということです。「学ぶこと」と「遊ぶこと」は対立するというより、補い合う関係とする解釈があります。特に子ども

においてはそうですが、大人でも同じで、「学んだこと」が身になるためには「遊び」が必要で、「遊んだこと」が身になるためにも「学び」が必要です。そうでないと、学べば学ぶほど、頭も、心も、からだも固くなり、不自由になるだけです。いくら遊んでも、気晴らしや、時間つぶしの楽しさしか得ることが出来ないため、「遊び」が「成長」に繋がらなくなるとされています。「学び」においてだけでなく「遊び」においても主語は学習者（遊ぶ人？）で主体性が重要なようです。

「医師としての生き方-放射線科編」—研修医のPOCUS利用のおすすめ—

内田 政史／医療センター 放射線科 教授

最近超音波検査は、ほとんど医師以外の方、臨床検査技師さんなどに依頼することが多いと思います。時代の流れでもあり、マンパワーから致し方ないことだとは思いますが、しかし最近医師の超音波離れが問題ともなっています。例えば急性腹症でも超音波ではなく、いきなり全腹部の単純CTを撮像するというのが一般的になっています。さらに超音波検査を行っても、その画像を見て診断できる医師が少なくなっています。もし検査できる人がいなければ何もできない状態となってしまいます。そこで、今回皆さんが研修医となったときに診療の一助となる超音波検査でのPOCUSについて少しお話ししようと思います。POCUSとはpoint of care ultrasoundの略です。「的を絞った、短時間の超音波検査」などいろいろな訳、言い回しがありますが、私は研修医の先生方の診療への手助けとなる有用なツール

と考えています。

超音波検査機器は非常にコンパクトで使い勝手が良くなり、すでに「第2の聴診器」などの古臭い扱いではなく、視診・聴診・触診・打診といった身体診察手法の代替・補完であったり、時にはその上位互換となることもある診察手技の一つとなっています。この超音波検査をぜひ医師にもう一度さわって、使ってもらおうということで始まったのがPOCUSと考えてもらっていいと思います。「ちょいあて」と訳す先生もいらっしゃいますが、なかなかいい訳だと思います。

プローブを「あてて、見る」だけで必要な臨床情報がリアルタイムに得られ、疾患の鑑別や基本的な診療方針の決定がきわめて簡単に行えるようになります。さらに日々外来や病棟業務をこなすようになると、簡単な医療処置や評価に超音波検査を

用いることも有用です。超音波ガイド下の中心静脈穿刺、胸水・関節・動静脈の穿刺や神経ブロック、生検なども超音波ガイド下で行うことが広まっています。さらに尿閉の評価や尿道カテーテル挿入時の成否判断、残尿量の計測などでも、超音波検査は活用されています。

このように、もはや超音波検査はアクセス良く、その場ですぐに使えるツールとし

ての立場を確立している機械です、研修医になられましたら報告書をさらっと見るだけでなく、ご自分でプローブを持って検査を試みてください、いかに表示するのが難しいか、いかに判断が難しいかがよくわかると思います、そしてそこで苦勞すると診断への新しい道が見えてきます、診断に自信が持てるようになりますので、ぜひおすすめします。

「医師としての生き方」

田尻 祐司／医療センター 糖尿病センター 教授

1984年に医学部を卒業して以来38年余の月日が流れ、2023年の春に定年退職を迎えます。本当に早いもので、まさに“Time flies!”の心境です。振り返ってみて後悔する点多々ありますが、反面楽しく満足できることも数多くあり、足して2で割ってほぼ“Even match”といったところでしょうか。そんな私に医学教育ニュースから「学生に向けて医師としての生き方」というテーマで原稿依頼が届きました。医学生時代や医師としての人生の中では数多くの出会いがあり、その都度少しずつ学び成長していった認識があります。以下は、私が医師を志して以来、特に心に残っている一言を集めたものです。気楽に読んでいただけましたら幸いです。

- ・「臨床医は、体力と患者さんを治したいという心が全てである」

当たり前のようなことですが、私が学生時代にこの言葉をいただいた麻酔科の先生は、「頭の良い勉強が好きな人は基礎に行きなさい」と続けられました。後半の部分はどうかとも思いましたが、当時は「体

力だけではダメでしょう。知識が一番大事なのは」と心の中で思ったものでした。38年が経過した現在、この言葉が身にしみてわかるようになり、私の医療に対する考え方の根幹の部分を支えていると強く感じます。時間や場所を問わず医療行為を求められる我々臨床医は、まさに体力、気力が常にフルチャージしていることが非常に重要であり、それを支えるのは患者さんを治してあげたいという臨床医として至極当たり前の気持ちであることを、若い先生方に伝えるのが我々の役目であると思います。同じ病気を同じように治療しても、担当医の心構え一つで、治療が成功したりそうでなかったりするケースにはしばしば遭遇します。臨床医としての本当の評価は「患者さんを治したいという強い意志」と「精神的にも肉体的にも強靱であること」に大きく左右されると、最近ようやくわかるようになりました。

- ・「これからは、良い医者でなければいけない」

これも、ただこういう風を書いてみても、何のことやらと思われるのが普通でしょう。研修医1年目のオリエンテーションの際に、当時の病棟医長の先生からいただいた言葉ですが、実際「何を当たり前のことをおっしゃるのか？」という印象しか残りませんでした。今から38年前は、まだまだ医療を取り巻く環境も豊かな時代であり、今日のような厳しい時代が来ることを想定しての言葉であったとすれば、その慧眼にはただ驚くばかりです。今は確かに、ただ単に「医者」というだけでなく、学会の認定する専門医や指導医などをいくつか持っておられる先生方がほとんどであろうと思います。患者がインターネットのホームページや口コミなどで、医師や病院を選ぶ時代であることは間違いありません。ただ、この言葉の本当の意味は、認定医や医学博士などの冠を付けた医者になりなさい、ということではなく、日々研鑽して「患者さんにとっての良い医者」になりなさい、という意味であったと解釈したいと思います。そういう意味合いの良い医者であり続けられれば、いかなる時代が来ようと何も心配することはない、ということを教えてくれた実に単純ではありますが深い意味を持つ言葉です。

・「医師の生涯学習など」とことさらに言うが、そんなのは当たり前のことだ」

これは、私がスタッフとして市中病院で勤務していた時、当時の院長先生が言われた言葉です。確かにその院長先生は部屋におられる時はいつも何

かしら文献を読んで過ごされており、あまり勉強をしない我々若い医師の机に（叱責の意味をこめて？）最新の文献のコピーを置いていただいたのを覚えています。今でも思い出すたびに恥ずかしい思いがよみがえります。先生の言われる通り、医師が生涯勉強を続けることは至極当たり前であり、これを怠れば患者さんに「先生」と呼んでいただく資格はありません。若い時分は結構何でも勉強という姿勢で研修するのですが、一定の年齢に達すると忙しさにもかまけて勉強をしなくなる人が多いようです。医学の進歩には終わりが無いわけであり、医師をやめるまでは少なくとも勉強を続けたいと思います。多忙な院長職にあっても勉学に対する真摯な姿勢を持ち続けておられた当時の院長先生のお言葉は、今でも鮮明に胸に刻まれています。

最近気に入っている言葉は、私が尊敬するソフトバンク社長の孫正義（ソフトバンクホークスのオーナーでもあります）の座右の銘、「志高く」です。実は彼は私の高校時代の同級生でもあります（1年の1学期のみですが）。常に前を向き上を目指しながら、苦勞を重ねて一代であれだけの会社を作り上げた彼の生き様には、大いに学ぶべき点があります。こういう厳しい時代であるからこそ、我々自身がより一層研鑽して、「志の高い」医師であり続けることが必要なのではないのでしょうか。

編集後記

今年度最後の医学教育ニュースでは、退職される6名の先生方に学生さんへのメッセージをご寄稿いただきました。いずれの先生の文章も含蓄のあるメッセージで、学生さんのみならず、教員にも是非読んでいただきたい内容です。

医学教育ニュースは、久留米大学医学部医学科のホームページ、Hondana、Google スペースにてご覧頂けます。皆様の様々なご意見を教務委員会まで頂けると幸いです。

編集責任者 秋葉 純／病院病理部 教授